

津山市史だより

2017.3
第8号



大正9年から昭和17年にかけての旧加茂町役場文書

これらの資料は、旧加茂町役場文書の名称で一括された書類を、古書店から購入したものです。資料の総数は115件131点におよび、年代は大正9年（1920）から昭和17年（1945）にかけての20数年間にわたっています。

平成の大合併前の旧加茂町域には、岡山県下で町村制が施行された明治22年（1889）6月の段階で、加茂・東加茂・西加茂・上加茂の4か村が存在しました。このうち、今の津山市加茂支所の周辺と旧町の北西部一帯が加茂村で、大正13年に町村制を施行して加茂町となり、昭和17年5月には東・西加茂村を併合しています。先述の年代と照らし合わせると、これらの資料は加茂村の末期から東・西加茂村併合前までの加茂町時代の文書ということになります。

内容を見ると、町会の議案綴や町会を含む各種の会議への案内もしくは出席依頼状が多数を占めており、町会議員または町長経験者の家に旧蔵されていたものと思われ、戦前・戦中期の旧加茂町域の村政・町政を探る上で有用になると考えられます。

（小島）

28年度第2回編さん委員会

2月21日 於 郷土博物館研修室

今回は、事務局からの報告事項が主体の会議でした。28年度の編さん事業の進捗状況や新年度予算の内示状況が報告され、今後の調査や市民への啓発の進め方について、委員から意見や要望が出されました。

部会通信

◆自然風土・考古部会

(部会長…河本委員、副部長…可児委員)

通史編について古代部会と記述の調整を行いました。特に、「白鳳寺院の創建」の部分は古代編と重複するため、古代編で記述することとなりました。今後も調整しながら、作業を進めていきます。

◆古代部会

(部会長…狩野委員、副部長…今津委員)

資料編の出版に向けて、掲載史料を選定しています。また、通史編の内容をすり合わせるため、自然風土・考古部会と合同部会を2月に開催し、出版へ向けて作業を本格化しています。

◆中世部会

(部会長…三好委員、副部長…久野委員)

資料編の出版に向け、市内外の資料を調査しています。二宮の高野神社関連資料の調査で、12月には真庭市へ、2月には山口県文書館が所蔵する毛利家関連資料の調査を行いました。

◆近世部会

(部会長…定兼委員、副部長…在間委員)

2月に部会を開き、新年度の計画や資料編・通史編の内容構成について協議した後、執筆者からの調査報告が行われました。3月には安井家文書の選別会を開き、候補資料を絞り込みました。今後も引き続き、個人所蔵資料の調査を進めていきます。

◆近現代部会

(部会長…在間委員、副部長…香山委員)

2月5日に部会と資料調査会を開催しました。部会では資料編編纂に向けた今後の調査方針などを話し合い、その後の調査会では加茂町関連の資料などを中心に調査しました。執筆者各自の個別調査も活発に行われており、資料編の刊行に向けて着々と準備を整えています。

◆民俗部会

(部会長…前原委員、副部長…安倉氏)

2月に部会を開き、調査報告や、来年度の調査予定について協議しました。地域に関する様々な聞き取り調査も続いています。

民話編に関しては、今までの調査で録音してきた音声データを文字起こしする作業を引き続き進めています。

『津山市史研究』第3号発行

新しい市史の発刊に先がけて、調査・研究内容の発表や新発見資料を紹介する『津山市史研究』、3月末に発行する第3号の内容は以下のとおりです。

- ・森俊弘「美作国守護代の歴史的展開」
- ・深見かつみ「津山地区におけるジャージー牛の消長」
- ・尾島治「津山の城下町における作人の形成と町作」
- ・小島徹「美作国絵図の描画内容の変遷」



市立図書館での展示風景（2月）

津山市史の編さんや地域の歴史への関心を寄せてもらうため、館内の一角でパネル展示を行い、子ども向けのクイズやパズルも作成しました。

編さん事業の経過（平成28年12月～）

平成29年
12月3日 美作学講座第4回
12月 「市史だより」第7号発行

2月5日 第2回近現代部会・合同調査

2月8～28日 図書館での展示

2月12日 考古・古代合同部会

2月13日 第2回民俗部会

2月19日 第2回近世部会

2月21日 第2回編さん委員会

3月20日 近世安井家文書選別会

3月25日 自然風土・考古部会

3月 「市史研究」第3号

「市史だより」第8号発行

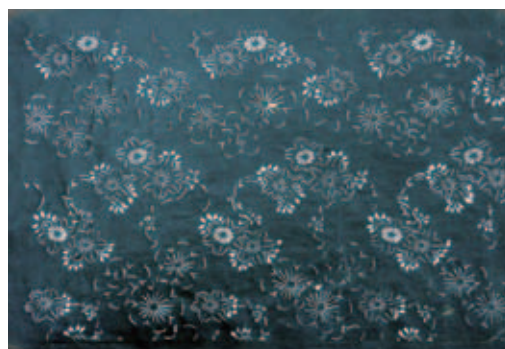


資料紹介 陶製の量水器のフタ
「なぜ大阪の市章があるの？」

これは、昨年夏に市内のあるお宅から寄贈されたものです。今で言うところの給水メーターのボックスのフタなのですが、陶製という珍しい材質で、しかも津山市章の剣大ではなく、大阪市章の濔標（みおつくし）が入っています。

津山市・大阪市双方の水道局に問い合わせましたが、現役で使用されていないためか、詳細は不明でした。ただ、津山市水道局には、津山市章入りの陶製のフタが保管されていました。大阪市のもが津山市で使われていた経緯も、寄贈者のお宅が大阪市から転居してきた訳ではなく、現状ではよくわかりません。

すべてが謎だらけではありますが、新式のボックスへの変更過程での廃棄の網を幸運にもかいくぐったために、戦中・戦後ごろの物資不足を物語る、貴重で珍しい資料であることには間違いありません。（小島）



お願い 古い物があれば
お知らせください！

こちらにも、市内のあるお宅から最近になって寄贈されたものです。近現代の賞状、書画など（写真上）のほか、染織に用いる型紙（写真下）も含まれていました。

市史編さんには、情報も資料もたくさん必要です！古い物を処分される前に、市史編さん室へご一報ください。市民の皆さんの力を合わせて、より良い市史を作っていきましょう。

久宗壮と立体農業

森元 辰昭

はじめに

久宗家の前庭に足を踏み入れると、右側に大きな石碑が立っている。それには次のような詩文が刻まれている（写1）。

「賀川豊彦先生詩碑」

美作の実作り 久宗壮氏におくる

昭和二十年八月十五日 賀川豊彦

美作の

椎茸作り 栗作り

山美しく 若葉栄え

人の見捨てし 山里も

乳と蜜とに蔽われて

今楽園と 化して行く

くるみ ひらたけ 山羊 緬羊

火山地帯の赤土を

くしくも開く パラダイス

美作実作り 桑いちご

赤い血の色 ルビー色

星も羨やむ 愛の園

月も太陽も 美作の

生命の森に 手を貸せば

実作り美作 愛の園

久宗壮建之

岡山県北、久米郡久米町（現津山市中北上）で立体農業を実践し成功を収めていた、久宗壮に対する賀川豊彦（以下賀川）の賛辞を記念碑としたものである。後にみるごとく、

久宗壮にとって賀川は恩人といっても過言ではなく、賀川の提唱する立体農業に文字通り一生を捧げて取り組んだのであった。その思想的背骨にはキリスト教があった。「愛の園」とは、賀川も理想とする「神の国」であった。

以下、賀川の影響を受けつつ、久宗壮がどのようにして立体農業を実践し、全国に普及させて行ったかをたどることとする。

1. 久宗壮と賀川豊彦

ユニークな自伝として注目された『久宗二等兵』によれば、明治四十（一九〇七）年岡山県久米郡久米町中北上で生まれ、大正十四

（一九二五）年三月に岡山県立高松農学校を卒業、倉敷にあった大原農業研究所（現岡山大学資源植物科学研究所）の助手として近藤万太郎所長の研究室で植物学の研究を続けていたが、翌十五年に父が死去したのを機に、失意のうちに帰郷した。昭和四年五月のことであった。多額の借金と弟が病死するなど、「逆境と試練の連続であった。精神的なよりどころを求め賀川先生に弟子入りした」（注1）と述懐している。

昭和五年五月五日、運命の出会いがあった。この日津山のキリスト教会で賀川の大講演会が開かれた（注2）。「賀川先生は日本の食料問題を解決するためには、米にたよらず、生命の樹をつくり、家畜を飼う『立体農業』の経営を説かれた。：：私が近藤万太郎博士の弟子であるこ

とを知った賀川先生から、美作の国を立体農業によって美しくつくるように激励をうけた。」（『久宗二等兵』一一二ページ）

賀川の名は、『死線を越えて』（上巻一九二〇年発行）が一カ年で二百十版を重ねる大ベストセラーになっっており、普く知られていたが、一九二五年にデンマークの農村視察を敢行してより、立体農業による農村の更正を目指すようになった（注3）。そして、『農村社会事業』（昭和八年）や『農村更正と精神更正』などを著し、各地で農民福音学校を開いてその普及につとめた。とりわけ『乳と蜜の流るゝ郷』（注4）は、主人公田中東助が、郷里を離れて出稼ぎをしながら次第にキリスト教と立体農業にめざめ、帰郷してその普及に尽くす物語であったので、広く読まれた。この中に久宗壮が登場する。その場面を以下に再現しよう。

東助は、胡桃の接木と聞いてびっくりした。

『えっ？ 胡桃の接木ができますか？』
彼は、今日まで、胡桃の接木が、日本では絶対に不可能であると、繰返し繰返し聞かされてゐた。で、この眼鏡をかけた青年が、無造作に接木してゐるのを見て、びっくりした。

『え、まだ他の地方ではやってゐないやうですが、私達の同志の久宗って



写1：賀川豊彦先生詩碑

いふ人が、胡桃の接木に成功したもんですからね。私たちは、今年初めてこんなことをやってゐるんです。』

この本は、昭和九年一月から十年十二月まで『家の光』に連載されたものを、十年十一月に改造社から発行したものである。ここに記された「同志の久宗」が久宗壮であることは明白であろう。また、賀川は、キリスト教の伝導活動として昭和二年二月十一日に第一回日本農民福音学校を開設するが、久宗壮は第五回から講師を勤めている。昭和十五年一月八日から第十四回日本農民福音学校が開かれた際の久宗壮について、賀川は次のように述べている。

久宗氏は美作の山の中で、私の書いた農村社会事業といふ書物を教科書にして、色々農村設計をしてゐられるが、私の書いたあの小さな書物を同氏ほど實際生活に生かしてくれる人は、日本にもさう多くない。今度は同氏が進んで私の故郷へ行って稲作の指導をしてくださるさうであるが感謝してゐる。(注5)

さて久宗壮は、昭和十三年より青年教育の教師となったが、二カ年の体験をまとめた論文が第一等賞となり、文部省「青年教育賞」を受賞、わずか四年の教師生活で青年学校長となった。この時も、賀川は栄達ではなく、立体農業の研究と普及に打ち込み、印税で食える生活を勧めた

という。

先の『久宗二等兵』には、昭和十九年の軍隊生活(補充兵↓突撃隊の二等兵など)が記述されているが、五ヶ月で除隊、しかし昭和二十年再び入隊したものの一ヶ月で除隊、理由は「君は学校長の資格では帰れない。立体農業の権威者である。帰郷して増産指導に挺身せよ」との特別配慮があつた(注6)。

見られるとおり、戦前期から賀川の影響によつてキリスト教精神(土を愛し、神を愛し、隣を愛す、三愛主義)と立体農業の実践者としてひたすら突き進むことになった。

2. 久宗壮の立体農業

倉敷から帰郷後、三年間で「シイタケ先生」と称され、「昭和八・九一〇年頃には、津山駅前のタクシーで『シイタケの先生』ところへと云へば、だまって連れてくる位に、全国各地から視察者が押しかけたものである。」(注7)

「田畑の作りを主体とし、樹木農業と有畜農業とをこれに加えたものをいう。椎、栗、胡桃、どんぐり等を山に植え、食料の補給源とし、山羊、羊を飼い乳をとり毛を用いることにより農家経済を充実すべし」といのが賀川の立体農業である。」と武藤富男が解説しているが(注8)、

久宗壮の立体農業の主体は、「クリと豚」(注9)であつた。

賀川と同じく久宗壮は、農民福音学校を開き久宗立体農業研究所を實習場として、県内はもとより広く県外からも実習生を受け入れて普及に努めた。次の資料は、賀川が講師を務め、久宗力家に残る賀川の扁額「土愛隣愛神愛」(写2)を揮毫したときの第一回美作農民福音学校の「案内」である(注10)。

祖国農村の窮乏を救へ 待望の美作農民福音学校開催
とき昭和二十四年四月四日午後一時より七日正午迄
日本再建は農村の生活確立にある。農村を忘れて日本の新生はない。農村は戦後の景気ではばらく酔ふていたが、今や危機に立つにいたつた。村を救ふ道は何処にあるか?

われらは二十余年の歴史と体験と実践によつて、その理論と方法を語る。農民福音学校とは言ふか、設備もない不完全な寺子屋の姿である。畳に坐して先生の声咳にふれつゝ学理と實際を学ぶ。土を愛し、神を愛し、隣人を愛する三愛主義に基いて新日本農村の礎石たらん青年よ来れ、まことに聖書に教へる「一粒の麦地に落ちて死なずは唯一粒にてあらん、もし死なずは多くの実を結ぶべし」一粒の麦を以つて任ずる者の学ぶところである。

●講義とその講師

農村改造論 賀川豊彦、農村恐慌対策 元代議士杉山元治郎、有畜農業 岡山県種畜場長蔵知 毅、人生と宗教 津山キリスト教図書館長森本慶三、アメリカの農業 同志社大学教授マツクナイト博士、聖書・丁抹に学ぶ 一麦教会牧師吉田源治郎、立体農業の実際 接木・食用苜蓿栽培 久宗 壮
賀川と並び日本農民組合運動等で活躍した杉山元次郎や津山キリスト教図書館長の森本慶三などが講師として久宗家に結集した。昭和二十五年には自宅に「久宗立体農業研究所」を設立し、全国から年二人の実習生



写2：賀川豊彦扁額



写3：賀川豊彦（右）と久宗壮

を受け入れ、立体農業の普及に努めた

(二十六年～五十年までに四十数名)。

立体農業を実践する久宗農場は、以下のような経営規模であった(注11)。

久宗農場経営

一、水田 三反三畝 水稻、裏作には小麦とレンゲ

二、畑 二反二畝 甘藷一反五畝、苗圃四畝、野菜三畝

三、家畜 乳牛一頭(生後一ヶ年) 和牛

二頭(預け牛として農繁期のみ飼育する) 豚三頭(種牡豚一、繁殖牝豚二)

綿羊三頭(コリゲール種、種牝綿羊一、繁殖牝綿羊二)、山羊四頭(ザーネン種

牝山羊一、乳用牝山羊三) ニハトリ

一五〇羽(ロックホン100羽、プリモ一

スロック五〇羽) アンゴラ兎四羽(採

毛用) 蜜蜂四群(洋種) 淡水魚類

鯉池三〇坪、鯉一、四年生五〇〇匹

共

ドジョウ池一〇坪ドジョウ二貫 ウナギ池一〇坪子ウナギ一貫

四、宅地利用 三〇〇坪、菓子クルミ、クリ、

カキ、マルベリー、ペカン、ボボ、ブドウ、

イチヂク、ビワ、アケビ、ザクロ、ビツクリ

グミなどの果樹類、庭園樹下にはシイタ

ケ、ヒラタケ榎木、バタリー鶏舎二棟

五、山林利用 約五町(大部分は松、雑木、

ヒノキ、スギの植林地) クリ園一町五反

一、五年生 シイタケ榎木約一万五千貫

(約一反五畝の山林利用) 果樹園一反

六、家族(名前、換算能力は省略)

経営主 壮(四五才)、妻(四五才)、母

(七六才) 長男(島大獣医科二年在学)

二男(小学校二年在学) 長女(高等

学校二年在学) 二女(中学校二年在学)

三女(小学校五年在学) 研究生 沢田

幸男(高知県内地留学生) 〃 三谷四

郎(高知県内地留学生)

七、農家収入の比率

①家畜類 六〇% ②シイタケ、

ヒラタケ 二〇% ③種苗、種菌

一〇% ④果樹類その他 一〇%

樹木農業と有畜農業に鯉やドジョ

ウ池などユニークな魚類も加わり、

まさしく立体的な経営であり、「ニ

ワトリで日給、キノコでボーナス、

クリで恩給、植林で養老年金」の目

標を達成した。

久宗農場は全国に知れわたり、講

演依頼が相次いだ。「昨年も今年も

共に百五十日から行脚している」と

いう状況であった。(注12)。

昭和三十三年には開設間もない旭

川荘に「立体農業研究所」が開設さ

れ、久宗壮が所長に迎ええられた

(注13)。また、昭和三十八年にオー

プンした観光栗園(第一観光栗園三

畝、第二栗園七畝)は、「久宗農場

前」という中鉄バスの停留所が設置

され、年数千名の観光客が押しかけ

る盛況ぶりであった。入山料二〇〇

円、自家製の「栗赤飯」三〇〇円が

大好評であった(注14)。

3. 久宗賞の創設

人気を博した『久宗式シイタケ栽

培法』『ヒラタケの人工栽培法』『手

軽にできる栄養食品の加工』『ヒラ

タケ、ナメコ、エノキタケ、制ガン

キノコ類の人工栽培』など多数の著

書の印税と観光栗園等の収益を原資

の寄付を機に、母校岡山県立高松農

業高校に『久宗賞』が設けられた。

昭和四十一年のことである(二十回

三三三名受賞)。さらに、農業の担

い手が減少するなか、農業従事者を

奨励する『久宗愛農賞』を設けた(昭

和四十八年、十二回七五名)(注15)

これら長年にわたる日本農業発展

の功績により、黄綬褒章、勲五等瑞

宝章、三木記念賞などを受賞した。

彼の生涯の活動と交友関係などは、『久宗壮の生きざま』に詳しい(注16)。

おわりに

耕作放棄地の拡大や農業の担い手

不足など、日本農業の危機的状况が

指摘されて久しい。最近になって、

藻谷浩介・NHK広島取材班『里山

資本主義』などで、久宗壮の隣村真

庭市でのめざましい林業再生の企業

活動などが、また、芸術家等の活動

が広がる西栗倉村・牛窓町なども注

目されてきた。米主体の農業を維持

しながら、農業再生の展望が開けな

いか、久宗壮の実践した立体農業は

もう一度見直されるべき時期に来て

いるといえよう。

注

(1)『久宗二等兵』(全国愛農会、一九七三年)九〇頁。

(2)『身辺雑記』(賀川豊彦全集)24、以下『全集』とする。昭和五年五月によれば、「△五月一日から私は九日迄岡山県を巡回しました。…：香加登教会で四日間奉仕いたしました(ママ)。

翌日(五日)引用者注)私は津山に行きました。津山教会で昼一回晩一回の講演をなし、翌日は法然上人の母方の家に当る立石家を訪問し、家宝を見せて貰ひ、(中略)立石氏は早くキリス

ト教になってその一族もキリスト教になってゐます(一一五頁)。ちなみに、この立石家とは、津山市二宮の大庄屋の立石岐家である。

- (3) ジョン・ラッセル・スミス「Tree Crops」を内山俊雄共訳『立体農業の研究』として発行（昭和八年二月）『全集』12、武藤富男解説、五三二〜五三三頁。
- (4) 『乳と蜜の流るゝ郷』（『全集』17、二八二〜二八三頁）。
- (5) 『身辺雑記』（『全集』24）二九七頁。昭和十五年二月号「武庫川の畔より」
- (6) 『久宗二等兵』九二頁。
- (7) 『私の立体農業経営』愛農会本部刊、一九五三年）一三四頁。
- (8) 『全集』12、五二九頁。
- (9) 『久宗二等兵』一一五頁。
- (10) 『私の立体農業経営』一五五〜一五八頁。なお、第八回の美作農民福音学校については、『広報久米』第三号（昭和三十年三月十五日号）に次のような案内が掲載された。

第八回美作農民福音学校開催
三月二十八日から四日間

於 久宗立体農業研究所

農村は今や深刻な危機に立つに至った。村を救う道がありか？これに答える唯一の道は、土と神と隣を愛する三愛主義に立って、立体農業を実践することである。まことに聖書に教える「一粒の麦地に落ちて死なばたゞ一粒であらん。若し死なば多くの実を結ぶべし」一粒の麦となつて農村の礎石たらしとする青年よ、来れ、共に学ぼう。

● 講師 聖書 高戸津山教会牧師、こ

久宗壮 略歴

年次	西暦	事項
明治 40 年	1907	4/26 岡山県久米郡久米町中北上に生まれる
大正 14 年	1925	岡山県立高松農学校卒業大原農業研究所長近藤万太郎博士の助手として種子学・育種学を学ぶ
大正 15 年	1926	父早世 (48 歳)
昭和 2 年	1927	2/11 賀川豊彦、西宮市の自宅で日本農民福音学校を 1 ヶ月間開催
昭和 3 年	1928	倉敷教会にて、田崎健作牧師により受洗
昭和 4 年	1929	5/ 帰郷「二千五百円という多額の借金、農会技術員となる、弟病死
昭和 5 年	1930	5/5 賀川豊彦、「神の国運動」のキリスト教伝道、津山で講演 賀川の指導により立体農業の研究を実践、
昭和 6 年	1931	2/11 賀川の第 5 回日本農民福音学校の講師となる (T1510/7 より兵庫県武庫郡瓦木村が賀川の自宅)
昭和 10 年	1935	賀川「乳と蜜の流るゝ郷」を改造社より発行、この中に久宗の実践 (胡桃の接ぎ木) が記述される。
昭和 11 年	1936	3/ 『埋木式椎茸栽培法』刊行
昭和 13 年	1938	青年学校教師となる
昭和 15 年	1940	1/8 賀川第 14 回日本農民福音学校開始、生徒 11 人、久宗壮 10 年に及び講師。
昭和 16 年	1941	9/22 文部省より「青年教育賞」受賞、青年学校長 (美和・中山・興亜) となる賀川「君は土を通しての教育者」栄達の道を断て！
昭和 19 年	1944	6/1 岡山中部四十八部隊に入隊
昭和 20 年	1945	3/ 赤紙、入隊→「君は増産指導に挺身せよ」1 ヶ月で除隊、小谷純一全国愛農会結成
昭和 22 年	1947	全国愛農会理事、岡山県愛農会長
昭和 24 年	1949	4/4-6 第 1 回美作農民福音学校開催、賀川豊彦「愛土愛隣愛神」扁額 為美作農民福音学校 5/ 『久宗式シタケ栽培法』刊行
昭和 25 年	1950	1/ 『日本再建と立体農業』(日本文教社) 刊行、久宗立体農業研究所開設 (年 2 人の実習生、26-50 年 40 数名)
昭和 26 年	1951	5/ 『農家台所必携』刊行
昭和 27 年	1952	2/ 『ヒラタケの人工栽培法』刊行
昭和 28 年	1953	1/ 『私の立体農業経営』刊行、岡山県知事賞受賞
昭和 30 年	1955	3/28-31 第 8 回美作農民福音学校開催
昭和 33 年	1958	5/ 『手軽にできる栄養食品の加工』(全国愛農会) 刊行、旭川荘に「立体農業研究所」設立、久宗荘、所長に就任 (7 年間、失敗)
昭和 34 年	1959	5/ 『立体農業-五反百姓の生き方』(全国愛農会) 刊行
昭和 38 年	1963	観光菜園オープン、翌年から中鉄バス観光、年数千名 (入料 200 円、栗赤飯 300 円、多い年 50 万円/1 日)
昭和 41 年	1966	6/ 地中海コリシカ島の千年生の栗林視察、栗を常食とする貯蔵と加工を住民と検討し意見を発表南米サンパウロ市の奥地に命の木ベカン・クルミの苗木植樹、立体農業を講演 7/ 『ヒラタケ、ナメコ、エノキタケ、制ガンキノコ類の人工栽培』(富民教会) 刊行岡山県立高松農業高校に「久宗賞」創設 (20 回 313 名) 釜山東西實業大学で講義、名誉教授
昭和 43 年	1968	11/22 大日本農会総裁高松宮宣仁親王より緑白綬有功賞を受賞
昭和 45 年	1970	全国観光協会副会長韓国ソウル女子大学客員教授として講演と実地指導
昭和 46 年	1971	沖縄県に招かれ茸類の試作指導及び適作物の検討
昭和 47 年	1972	『年中発生高収益シタケ栽培法』(富民協会) 刊行
昭和 48 年	1973	3/15 『久宗二等兵』刊行 (『愛農』に 30 回連載岡山県立高松農業高校に「久宗愛農賞」創設 (12 回 75 名)
昭和 50 年	1975	台湾の南 (たかさご族) 地帯で栗林の奨励と実地指導
昭和 51 年	1976	内閣総理大臣より黄綬褒章 (財) 蚕業教育振興会より表彰状 (蚕業教育に尽力) 10/5 長野士郎岡山県知事が久宗立体農業研究所を訪問 (「吉備高原都市福祉農場構想」)
昭和 53 年	1978	『わが家の手づくり食品』(富民協会) / 『生命の樹に懸ける-立体農業のすすめ-』(富民協会) 刊行
昭和 56 年	1981	北米ニュージャージー州にて茸の種菌指導
昭和 57 年	1982	天皇陛下より勲五等瑞宝章受賞
昭和 58 年	1983	三木記念賞受賞
昭和 59 年	1984	10/6 病氣入院 (60.7.1 長野知事見舞い)
昭和 60 年	1985	久米町より文化功労賞受賞 10/11 帰天、内閣総理大臣叙従六位
昭和 61 年	1986	岡山県立高松農業高等学校「記念の石-久宗荘先生を偲んで-」刊行

注) 『久宗社の生きざま』その他、賀川については『賀川豊彦全集』24 巻、年譜。

- れからの林業 野澤岡山県林務部長、ヒックス・マルベリー接木 山内岡山県蚕業試験場長、特用樹種の解説 片山岡山県林業試験場長、ニュージランドの畜産 (幻灯) 蔵知技師、水稻培土栽培 堀家隆士、クリの活着 一〇〇%斜接法実習、シタケ、ヒラタケ栽培実習 久宗壮
- 講義と実習 (毎日午前九時から午後五時迄)
- 三月二十八日 高戸、久宗の各講師、
- 三月二十九日 高戸、久宗の各講師、
- 三月三十日 高戸、山内、片山、堀家、蔵知 (夜) 各講師、三月三十一日 農村行脚記」の連載記事がある。
- (11) 『私の立体農業経営』一五二〜一五六頁。
- (12) 『私の立体農業経営』一六五頁。なお久宗力所蔵「津山朝日新聞」に「全国農村行脚記」の連載記事がある。
- 久宗壮の生きざま (クリスチャン・グラフ社、一九八七年) 参照。
- (13) 社会福祉法人旭川荘「二十年の歩み」(一九七七年)「立体農業研究所」、旭川荘三十年誌編集委員会「福祉社会をめざして 旭川荘の三十年」(一九八七年) 創設期のうち「立体農業研究所」を参照のこと。七年間続き、八年目に畜産科に吸収された。
- (14) 『久宗二等兵』一一六頁。
- (15) 岡山県立高松農業高校「記念の石-久宗壮先生を忍んで」(一九八六年)
- (16) 田中芳三編『久宗立体農業の創始者久宗壮の生きざま』(クリスチャン・グラフ社、一九八七年) 参照。
- 主催 久米町大井西愛農会
- 申込期日 三月二十五日
- 持参品 筆記用具、剪定鋏、ナイフ、聖書、賛美歌など
- 受講料 久米町民は無料、(町外者 一五〇円)、申込 坪井局区内久米町坪井上 森 操
- 主催 久米町大井西愛農会
- 申込期日 三月二十五日
- 持参品 筆記用具、剪定鋏、ナイフ、聖書、賛美歌など
- 主催 久米町大井西愛農会
- (13) 社会福祉法人旭川荘「二十年の歩み」(一九七七年)「立体農業研究所」、旭川荘三十年誌編集委員会「福祉社会をめざして 旭川荘の三十年」(一九八七年) 創設期のうち「立体農業研究所」を参照のこと。七年間続き、八年目に畜産科に吸収された。
- (14) 『久宗二等兵』一一六頁。
- (15) 岡山県立高松農業高校「記念の石-久宗壮先生を忍んで」(一九八六年)
- (16) 田中芳三編『久宗立体農業の創始者久宗壮の生きざま』(クリスチャン・グラフ社、一九八七年) 参照。

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催
美作学講座—津山市史関連研究から—

● 第4回 12月3日

**津山藩の妊娠・出産管理政策からみた
「女」と「子ども」のいのち**

沢山 美果子氏（近世編執筆）



今年度の最後は、順正短大や岡山大学などで教鞭を執られ、日本近世の女性史をご研究の沢山美果子氏にご講演いただきました。

まず、「いのち」から近世社会を捉え直す研究が進展している現状を紹介され、その「いのち」に接近する手がかりとして、津山藩の妊娠・出産管理政策を採り上げられました。

この政策は人口減少地域で取り組まれ、①妊娠・出産の管理、②手当支給・貸与、③教諭を中心に実施されたこと、そして元禄の生類憐み政策から「いのち」への介入が始まることを確認の後、山北村の懐胎書上帳を分析されました。

津山藩では「赤子間引取締」により、妊娠4か月での届出が義務付けられていたにもかかわらず、実際の届出の平均は6か月余りでした。誰からも妊娠が分かり、子どもとして育てる決意をした段階の届出だと推測され、女のみが知り得る妊娠の自覚に依拠せざるを得なかった妊娠・出産管理政策には、意思そのものを取り締まらねばならない困難があったとも指摘されました。

また、夫婦が描かれている津山藩の間引き教諭書を紹介され、産むか否かの決断に男と女が関与していることを確認し、市史の調査中に発見された史料から、墮胎・間引きへの具体的な対応を解説され、お話を締めくくられました。今までの津山市史では触れられていなかった問題に関するご講演で、聴講者の皆さんは熱心に聴き入り、質疑応答も活発に行われました。

新年度の美作学講座も、今年度と同じく市史をテーマとして4回開催する予定です。どうぞご期待ください。

津山市史だより
第8号

発行：平成29年3月31日
編集：津山市史編さん室

〒708-0022 岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内

TEL：0868-22-5820 FAX：0868-23-9874 Eメール：tsu-haku@tvtnet.jp